≪２０１５年５月　月例会報告≫

＊＊＊

旧ユーゴスラビアが日本に残す サッカーの遺産

―ボスニア・ヘルツェゴビナから見つめて―

森田太郎（サラエボ・フットボールプロジェクト代表／ZONE BiH 日本担当）

＊＊＊

【日　時】2015 年 5 月 30 日（土）16：00～18：00（その後、阿佐ヶ谷駅周辺にて懇親会→もう 1 軒）
【会　場】杉並区　産業商工会館（杉並区阿佐谷南 3-2-19）
【テーマ】旧ユーゴスラビアが日本に残すサッカーの遺産
～ボスニア・ヘルツェゴビナから見つめて～
【演　者】森田太郎（サラエボ・フットボールプロジェクト代表／ZONE BiH 日本担当）
【コーディネーター】小池正通
【参加者（会員・メンバー）12 名】梅本嗣、奥崎覚（Qoly）、春日大樹（筑波大学大学院）、金子正彦（会社員）、岸卓巨（スポーツ・フォー・トゥモロー事務局）、小池正通、小池靖（サッカースポーツ少年団）、白井久明（弁護士）、谷口昭彦（静岡産業大学）、茅野英一（帝京大学）、徳田仁（(株)セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）
【参加者（未会員）9 名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、加藤燦（学習院大学）、北原由（サッカー史研究会）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、郡司穣（JICA）、志村岳（セリエ）、露口能彦、松岡耕自、森田太郎
【懇親会から参加】安藤裕一
【報告書作成者】森田太郎

＜目　次＞

1. ボスニア・ヘルツェゴビナとの出会い　（P2~）
2. 旧ユーゴスラビアが日本に残すサッカーの遺産～ボスニア・ヘルツェゴビナから見つめて～（P3~）
3. ボスニア・ヘルツェゴビナの育成の現場　（P10~）
4. 質疑応答　（P13~）

１．ボスニア・ヘルツェゴビナと私の出会い

私は 1999 年にボスニア・ヘルツェゴビナに行くことになりました。もともとはバスケットボールの選手だったので、サッカーとは全く関係ありませんでした。その私とのサッカーとの出会いは 90 年のワールドカップ・イタリア大会で、本格的にサッカーを観たのは、94 年のワールドカップ・アメリカ大会でした。その時は、全ての試合を録画したほどだったので、今でもその時の記憶は確かです。ただ、その時になぜこの大会にユーゴスラビアがいないのか、ましてや、ユーゴスラビアという国自体も知りませんでした。そして、レッドスター・ベオグラードというチームも知りませんでした。

そのユーゴスラビアとの出会いは、バスケットボールでした。

それは、ＮＢＡに関するテレビ番組で、紹介されたユーゴスラビア代表で、セルビア人のブラディ・ディヴァッツ選手の言葉でした。

それは、中学校前から同じユニフォームを着て成長してきて、プロ選手となってからも家族ぐるみで付き合っていたクロアチア人の友人たちと口を利くことすらなくなってしまい、深い溝が入ってしまったという言葉でした。その言葉を聞き、私の中で浮かんだ言葉が「なぜ？」でした。

なぜ、民族が違うからと言いながらも、家族ぐるみで付き合い、アメリカで共に生活している仲間たちが、紛争が起きたことで口も利かなくなるような関係になってしまうのか、それが私の中で大きな疑問となりました。

そのきっかけでユーゴスラビアという国を調べてみようと思ったのが、1994 年、1995 年という時期で、今でいうイスラム国やウクライナ紛争のように、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争が、新聞やテレビのトップニュースとして報道されていた時期でした。

そこから、スポーツで亀裂が入ることはおかしい、スポーツで何かができないかという思いで大学進学を目指し、大学に進みました。大学に入ること、学ぶことのすべてはユーゴスラビア、ボスニア・ヘルツェゴビナについて学ぶためでした。

そして、その私が初めてボスニア・ヘルツェゴビナに行くことになったのが、1999 年でした。

ボスニア・ヘルツェゴビナは、ユーゴスラビアという国が分断して生まれた国です。

この国の戦争は、1992 年から 1995 年 11 月 30 日まで断続的に続き、首都サラエヴォでも市街戦が行われましたし、山間部では異民族の人々が虐殺される、家財道具や財産が略奪されるということが行われていました。

よく日本の報道とか、書籍とか当初読まれた方は、民族が違うから、宗教が違うからという形で理解されたと思うのですが、最近になってやっと見直されてきました。そして、わかってきたことがありました。それは、民族対立はあったのですが、同じ民族同士での殺し合いも同様に起きていたということです。要するに、この戦争は、カラシニコフ銃などの武器を持った「ならず者たち」が、好き放題やったというものでした。正規軍もない状態でした。ユーゴスラビア正規軍というものはありましたが、ボスニア・ヘルツェゴビナが独立してからはその正規軍も入れなくなり、国内に合った武器を無法状態の中で手にした「ならず者たち」が好き放題に行ったということがこの戦争だったということです。なので、人々はいったい何にその憎しみを向けたらいいのかがわからないというのがこの戦争です。

この戦争での死者は 20 万人、国内避難民と難民を合わせて国、故郷を出た人々が 200 万人となりました。

その紛争後に、ボスニア･ヘルツェゴビナは国の中に２つの地域ができるという状況になりました。

セルビア人が住むセルビア人共和国と、クロアチア人とイスラム教徒が住むボスニア連邦に分かれました。実は、クロアチア人が多く住むのは、南部の街モスタルを中心としたヘルツェゴビナ地域となります。残りはイスラム教徒がほかの地域に多く住むとなっています。一緒にイスラム教徒とクロアチア人が住んでいる状況ですが、お互いにかなり対立している状況です。

今日トピックとしてあげるヘルツェゴビナ地域というのは、その対立の最前線となっています。

そのボスニア・ヘルツェゴビナで私が何をしたかったかというと、要するにスポーツを通じて仲良くしてほしかったので、２つの地域から 15 歳以下の子どもたちを集めて一緒に仲良くサッカーをして、双方の地域を行き来する、１ヶ月に１回は大会を開こう。そして、親も巻き込んでいこう、そして、地域全体の対立をなくしていきましょうという活動をしてきました。

この活動を続けてきたサッカークラブを巣立っていった選手たちは総勢 300 人を越え、2006 年にはチームが来日しました。その時に、親善試合を行ったのが、小池さんが率いる松原 FC で、今でも子どもたちにとって素敵な思い出として残っています。

オシム監督も活躍したスタジアムも破壊された

そして、2008 年に、子どもを募集しての活動は終わりました。その活動を終えた理由は、ボスニア・ヘルツェゴビナのサッカー協会が統一して、子どもたちのリーグも統一され、子どもたちがサッカーを通じて両地域を行き来することができるようになったからです。私がいたころは、２つの地域がそれぞれにリーグ戦を行い、民族ごとにサッカーをしていた時代でした。要するに両地域に行き来することができませんでした。それができるようになってきたので、私たちは双方が行き来して、サッカーを通じて交流する役割を地元のサッカークラブにバトンパスし、その役割を終えました。

そして、今度はボスニア・ヘルツェゴビナの大人の方の交流を促進していこうという方にシフトチェンジしていきました。

２．旧ユーゴスラビアが日本に残すサッカーの遺産～ボスニア・ヘルツェゴビナから見つめて～

最初に、ユーゴスラビアと聞くとどんなイメージがあるかお聞きしたいと思います。
「東欧のブラジルみたいなイメージで。足元の技術が高くて、攻撃的なサッカー」
「父がピクシーが大好きだったので。ストイコビッチのプレー。」（春日さん）
「ぼくらの世代、還暦が近い世代ですと、ジャイッチ。ドラガン・ジャイッチですね。」（阿部さん）
「ジャイッチがフォクツをちんちんにしたというのが印象に残っていますね。」（中塚さん）

ジャイッチもそうですし、ピクシーもそうですし、それから、東欧のブラジルもそうですし、その東欧のブラジルを探りに行ったのが、『幻のサッカー王国』の著者でこのサロンのメンバーでもある宇都宮徹壱さんですし、私自身もその国でサッカー指導者のライセンスを取得し、サッカーを学びなおしてきたので、私の目線から見つめてきたユーゴスラビア、ボスニア・ヘルツェゴビナのサッカーというものをお話ししたいと思っています。

ただ、ユーゴスラビアでサッカーを学んできた指導者というのは、私以外にもたくさんいらっしゃいます。オシムさんの通訳を市原で務めた間瀬さんは秋田で監督を務めていますし、札幌のバルバリ

ッチ監督の通訳を務めている塚田さんもベオグラード大学でサッカーを学んできた方です。かなりたくさんの方が、ユーゴスラビアのサッカーというものを、クロアチアで感じたこと、セルビアで感じたこと、モンテネグロで感じたことがあると思います。私はボスニア・ヘルツェゴビナで感じたことというものをお話しできればと思っております。

まず、二大巨匠から入っていきたいと思います。オシムさんと、ハリルホジッチさんですね。日本代表監督にハリルホジッチさんになった時、多くの方が「誰？」と思ったと思うのですが、ボスニア・ヘルツェゴビナの人たちからすると「よく呼べたな！」というのが率直な感想です。それぐらい凄い監督を一本釣りで呼べる日本は凄いなと思います。実は、元通訳の千田さんから最近聞いた話なのですが、実はハリルホジッチさんは AC ミランの監督になる予定だったところ、運よく日本に呼べたということを知りました。もしそうなっていたら、危なかったと思います。

それでは、ここで旧ユーゴスラビアから日本にやって来た選手を紹介していきたいと思います。

まずは、ドラガン・ストイコビッチ選手です。彼は、７年間日本で選手としてプレーし、監督も務めた方です。つい最近も褒章も受賞されました。

そして、マスロバル選手。フリーキックが鬼でした。ジェリコ・ペトロビッチ選手。この選手は選手としてはよかったのですが、監督としては、すぐにクビにされてしまいました。彼らはモンテネグロ出身の選手たちです。

それから、ミリノビッチ選手、ズラタン選手、ノヴァコビッチ選手がスロベニア出身の選手です。

エディン・ムイチン選手、セレッソ大阪で活躍されたアルビン・ペラック選手、アルミル・トゥルコビッチ選手がボスニア・ヘルツェゴビナ出身の選手たちです。

それから、今活躍しているのがクロアチア出身のミキッチ選手ですね。

その他にもたくさんいるのですが、旧ユーゴスラビア出身の選手たちが日本で活躍されたことは間違いない事実であると思います。

その選手たちが日本の選手たちに伝えたことは、プロフェッショナルイムズだったと思います。試合に挑む気持ちの作り方、プロとしてどうあるべきかということを伝えてきたと思います。

ただ、その姿勢はドゥンガ選手、レオナルド選手などほかの国の選手たちも同様に伝えてきてくれたと思います。では、ユーゴスラビア出身の選手たちが残してきたものは、スポーツを越えたサッカーの力だったと思います。なぜかというと、彼らが日本で活躍した時代は、ユーゴスラビアは戦争の時代でした。ストイコビッチが活躍した時期もコソヴォ紛争の期間で、ストイコビッチはその時期、名古屋での試合を終えて寝ないで、ユーゴスラビアに戻って代表選手としてプレーし、またすぐに日本に戻ってプレーするという生活を送っていました。その時、NATO 軍の空爆に抗議した彼の姿は大きく報じられました。

また、ヨーロッパ選手権の予選では、ユーゴスラビア（セルビアとモンテネグロで構成）と独立したクロアチアが出場権を争って戦うのですが、この試合に挑む選手たち、サポーターたち、関係者を追ったドキュメンタリーをオランダの会社が制作しているのですが、是非見ていただきたいと思っています。

この試合で活躍した選手たちは、チリで開催されたワールドユースで世界一になったメンバーたちで、幼少期からともにユーゴスラビアのユニフォームを着て活躍してきた選手です。

クロアチア代表のボクシッチをマークするミハイロビッチ選手も、クロアチアのエースであるシュケル選手をマークしようとしているユーゴビッチ選手もワールドユースを共に勝ち取った仲間たちです。

この試合は、クロアチアの首都ザグレブのマクシミール・スタジアムで行われました。この試合は結局引き分けに終わり、ユーゴスラビアが本選に出場を決めました。

ところが、本選でも、同じ組に入ったのが同じくユーゴスラビアから独立したスロベニアでした。そして、もともと一緒にサッカーをしていた選手たちと違う国同士で戦うということになりました。

国は分断する、戦争をしている、対立をしている。そういう背景の中でサッカーをしていく。そういう状況においては、ただサッカーをするということではなく、どれだけ多くの人たちを背負っているかということになります。

いい加減なプレーをすれば家が燃やされるとか、家族が危険にさらされるとか、そういう危険と隣り合わせの状況でサッカーをすることになっていました。

そういったことを、Ｊリーグでも、ヨーロッパでも続けてきたことで、選手たちにも、そして、私たちにもサッカーが持っている力というものが伝わってきたのだと思っています。

さて、もう１つが監督、指導者たちです。

まず、代表されるのが代表監督を務められ、市原でも活躍されたオシムさんがあげられると思いますが、他にも、市原、名古屋、そして、大宮を率いたスロベニア出身のベルデニック監督がいます。そして、ガンバ大阪と市原で監督をされていたヨシップ・クゼ監督です。彼は、エンボマを開花させた監督です。彼はクロアチア出身です。現役時代は、名門ディナモ・ザグレブの選手として活躍し、クラニチャールと共にプレーしました。そのクラニチャールは後にクロアチア代表監督になり、息子もクロアチア代表のエース格として活躍していました。それから、今を時めくのは、ミハイロ・ペトロビッチ監督です。広島を育て上げ、森保監督に引き継ぎ、そのチームは優勝し、浦和に移籍してからはその育ててきた

選手たちを全部浦和にもってきて、今成果を出して、注目されています。彼はセルビア出身です。

ほかにも、札幌の監督をしているバルバリッチさんがボスニア・ヘルツェゴビナ出身ですし、沢山の方々が日本に指導者としてやって来ました。

さて、ユーゴスラビア出身の監督たちが残したものが何なのかと考えていきますと、ユーゴの指導者は首尾一貫として「個をいかに融合させていくか」ということに長けている指導者だということです。一人一人の武器というものを見極めて、それをどのようにパーツとして組み合わせていくと強くなるかということを考えていくのが非常に優れています。

なので、相手を見極めて絶妙に配置した時は成果を出し、それが上手く行かないと惨敗するというのがユーゴスラビアです。それが顕著に表れたのが、１９９０年のワールドカップイタリア大会のドイツ戦です。

ブレーメ、マテウス、クリンスマン、フェラーを擁して最強だったドイツに対して、ユーゴスラビアは戦ったのですが、メディアがサビチェビッチ、プロシネチュキなどのタレントを使えと要求しました。オシムさんはそれとはまったく違う考えだったのですが、一切無視してメディアに合わせた布陣をして惨敗します。その後はオシムさんが考えるタレントをそろえれば勝てるわけではないという布陣でユーゴスラビアは勝っていきます。要するに、個をどのように融合させて勝つのかということを常に考えていくことが、大切にされています。

さて、写真に写っているのが、私と一緒にＵＥＦＡのライセンスを取るために勉強してきたオシムさんの息子アマル・オシムです。

彼は、一緒に勉強してきた仲間であり、その後市原でも監督を務めていましたので、講演会とかで話してもらうなど、いろんな場面で協力してもらっていました。

実は彼の残した言葉がユーゴスラビアの監督がどうして日本でフィットするのかということが凝縮されていたと私は感じています。その言葉が未だに私の中で生きています。

それがこの言葉です。

「ヨーロッパにおける監督は、軍事司令官。日本ではそれが『教育者』だった。」

海外だと、一人一人が自分自身をここで使えということを明確に主張しますが、日本では選手たちが「教えてほしい」と教えを乞い、教えることに耳を傾けるという経験をしたということが驚きだったと言っていました。プロの監督という立場において、教師として選手に接することができた。自分が教えることを素直に聞くことができる選手たちがいたことに驚いたのです。

そのいい例として挙げられるのが、阿部勇樹選手、山岸選手、羽生選手、水元選手などでしょう。オシム監督の功績は日本代表監督を途中でやめてしまったことで、なかなか見えなのですが、その一番の功績はこの選手たちだと思います。これだけ息長く選手としてプレーできる選手たちを育て上げたことだと思います。ずっと長くＪ１で活躍する選手として、試合中に走り続けることのできる選手たちを育ててきたことが目に見える成果だと思います。それは、彼らが学びを求めて、オシム監督からの教えを吸収してきたからこそだと思います。

なので、ユーゴスラビアの監督たちが残してきたものは、教育者としての教えだと思っています。かつては、デットマール・クラマーさんが教育者として教えてきてくれたと思うのですが、９０年代からは間違いなくユーゴスラビアの指導者たち教育者として日本に教えを残していって、その教えを受けたのが素直に聞き入れることのできる日本だったということで見事に融合したのだと思っています。そして、強い代表チーム、世界でもレベルの高いＪリーグというリーグに成長してきたのだと思います。

ハリルホジッチさんのサッカーについて感想がある方は？

「今までの日本のサッカーは繋いでつないでというものでしたが、縦に早くつなぐというのは新しい。」
「ザッケローニ監督などは選手をある程度固定していたが、この監督の場合は、選手全員が気持ちを高めて、みんながやる気になるようなものかと思っていました。」

ハリルホジッチさんのルーツを探りながら、ヘルツェゴビナのサッカーについて考えていきたいと思います。

実は、ボスニア・ヘルツェゴビナという国の名前は民族名を表しているのではなく、地域名を表しています。ボスニア・ヘルツェゴビナの北部はボスニア地方、南部がヘルツェゴビナ地方といいます。

ボスニア・ヘルツェゴビナといっても、このボスニア地方のサッカーとヘルツェゴビナのサッカーでは色が異なります。

オシムさんのサッカーがボスニア地方のサッカーであり、ハリルホジッチさんのサッカーがヘルツェゴビナ地方のサッカーだと言えます。

簡単に説明しますと、ストイコビッチ選手が活躍していたユーゴスラビア代表のサッカーがボスニア地方のサッカーの特徴がよく出ているものです。要するに、あまり急がず、繋いで、シュートを撃つだろうというところでも１本パスが出る。のらりくらりとしたサッカーだと言えます。

対して、ヘルツェゴビナ地方のサッカーは、クロアチア代表のサッカーに非常に似ています。単純明快なサッカーです。縦に速く展開し、スピードのあるサイドを使ってゴールに迫るというのが、ヘルツェゴビナ地方のサッカーです。

ユーゴスラビアが崩壊してから、どちらのサッカーが成果を残しているかと言いますと、後者のヘルツェゴビナ地方のサッカーであると言えます。クロアチアはワールドカップで３位に入りましたし、出場回数でも断トツです。

とにかく、結果重視のサッカーです。なので、「遊び」というものはありません。

ヘルツェゴビナ地方を探っていきますと、モスタルがヘルツェゴビナ地域の中心地になります。ハリルホジッチさんはヤブラニッツァという街の出身です。さて、このヤブラニッツァをはじめとしてヘルツェゴビナ地域のサッカー選手の多くがモスタルのクラブチームであるヴェレジュ・モスタルというクラブに集まってくる構造でした。

さて、ヤブラニッツァというと、もっとも有名なボスニア・ヘルツェゴビナ・ヤブラニッツァというチームで頭

ルン・ミュンヘンで活躍するに至ります。

話をヘルツェゴビナ地域に戻しますと、今、ボスニア・ヘルツェゴビナの４強はサラエヴォを本拠地とするＦＫサラエヴォと、オシムさんも活躍したＦＫジェリェズニチャルと、ヘルツェゴビナの２強がいます。シィロキ・ブリエグとジリニスキー・モスタルというこの２チームは常に優勝を争うクラブです。

さて、他にも、メジュゴリエという街や、メトコビッチという街も多くのタレントを輩出している地域です。メトコビッチからはコンサドーレ札幌の監督で、ユーゴスラビア代表のディフェンダーでもあったバルバリッチさんを輩出しています。

それから、ドゥブロヴニクです。世界的にも有名な世界遺産の街ですが、ここからも最近世界的なタレントが生まれそうだという話がありますね。小池さんいかがですか？
「ハイロビッチ選手ですね」

それから、現在セルビア人共和国側に入っているトレビニェという街からも多くのタレントが生まれています。

また、あの有名なズヴォニミール・ボバン選手のボバン一族はこのヘルツェゴビナ地域出身です。

要するに、このヘルツェゴビナ地域はタレントの宝庫だと言えます。

それでは、そのヘルツェゴビナ地域の中心のモスタルについてお話ししたいと思います。

ユーゴスラビア時代において、サラエヴォやモスタルというのは、地方都市、特にモスタルに関しては小さな小さな町でした。にもかかわらず、その町のクラブであるヴェレジュ・モスタルはユーゴスラビア１部リーグに常に所属している強豪チームでした。日本でいうと、ジュビロ磐田みたいなクラブですね。サッカーで知る以前、「磐田」という名前は多くの人が知りませんでしたよね。
それと似ていると思います。

そんな地方都市の街のクラブが、天皇杯も優勝していますし、国内リーグでも優勝争いに顔を出す強豪チームでした。

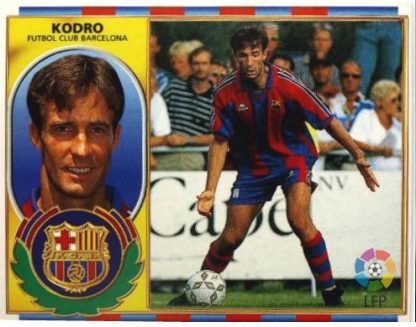
オシムさんが、初めて監督としてのキャリアをスタートさせたのがジェリェズニチャルでしたが、彼が監督として初めてタイトル監督が目前に迫ったのが、日本の天皇杯にあたるチトーカップでした。その決勝に勝ち進んだ、地方都市のサラエヴォ出身のジェリェズニチャルと、モスタル出身のヴェレジュでした。首都ベオグラードやザグレブ、スプリット、クラブではなく、ボスニア・ヘルツェゴビナの地方都市を本拠地とする２つのクラブがユーゴスラビア王者を決める決勝に進んだのです。

その試合に勝ったのは、ヴェレジュだったのですが、この試合で２ゴール決めたのがハリルホジッチさんで、オシムさんの輝かしい指導者としての第一歩を完膚なきまでに叩きのめしたのがハリルホジッチさんだったのです。

では、このヴェレジュがなぜここまで強かったのかと言いますと、それはモスタルという街がタレントの宝庫だったということではなく、ヘルツェゴビナ地域のトレビニェやメトコビッチの人々にとって、選手としてヴェレジュでプレーしたい、ヴェレジュの赤いユニフォームが来たいと思っていたのです。だからこそ、このクラブに多くのタレントが集まったのです。

このクラブ出身の選手を紹介しますと、ボスニア・ヘルツェゴビナ代表のエースでありキャプテンでもあったセルゲイ・バルバレス選手。彼は、ハンブルーガーＳＶで得点王となり、日本の高原選手とも一緒にプレーしていました。また、メホ・コドロ選手です。バルセロナではうまく行きませんでしたが、スペインで活躍しました。札幌のバルバリッチ監督もそうです。

旧ユーゴスラビア時代、このモスタルには、このヴェレジュしかありませんでした。ですから、民族関係なく多くの選手が集まりました。このモスタルの街で、何人ですか聞くと、「モスタルっ子」と答えます。さらに問い詰めて聞くと「ユーゴスラビア人」と答える人が多かった街です。セルビア人、クロアチア人、イスラム教徒と言わず、モスタルという街に誇りを持っていたのです。モスタルという街の名前の意味は「橋の番人」なのですが、その橋と街に誇りを持ち、自らを「モスタルっ子」と言っているほどでした。そこには、民族の区別というものがなかったそうです。



それが、紛争を機に変化します。

モスタルは、内戦当初、街を包囲したセルビア人勢力から街を守ろうと、クロアチア系とイスラム教徒系が協力して闘い、セルビア人を撃退します。町に住んでいるセルビア人は虐殺されました。そして、セルビア人がいなくなったら戦いが終わるかと言えばそうはなりません。

次におこったのが、クロアチア系とイスラム教徒系の戦いです。

それが、ちょうど橋を挟んで西側にクロアチア系、東側にイスラム教徒計が陣取り激しい戦闘を繰り返していきます。最終的には、「橋の番人」である人々が、その橋を戦争によって壊してしまい、スタリ橋は崩れ落ちました。

さて、ヴェレジュ・モスタルの本拠地のスタジアムは、実はモスタルの西側地域にありました。多くの歴史と伝統を刻んできたスタジアムが西側にあるということは、クロアチア系の地域にあるということで、戦後、このクロアチア系地域にジリニスキー・モスタルというチームが誕生し、そのクラブの本拠地になってしまい、ヴェレジュはスタジアムを失います。なので、戦後ヴェレジュはそのスタジアムを本拠地として使えなくなりました。

では、このジリニスキーというクラブは何なのかということですが、実は、このクラブにも古くからの歴史がありました。しかし、チトー政権時代に民族色の濃いクラブは活動停止となり、ジリニスキーは活動できずにいました。

しかし、紛争後にクロアチア人の人々によってこのジリニスキーが復活し、このヴェレジュが使っていたグラドスキー・スタジアムを本拠地としました。ヴェレジュはヤブラニッツァのクラブや他のクラブのスタジアムを借りるなどして活動してきました。そして、やっと最近スタジアムらしきスタジアムが完成しました。

実際に行かれた小池さんが「えっ？スタジアム？」って思われるほどの仮設のスタジアムです。

オシムさんの奥さんとお話をすると、モスタルのスタジアム問題になると、一緒になって使えない、ヴェレジュが使えないことが非常に残念だとおっしゃっています。

さて、そのジリニスキーですが、ルカ・モドリッチ選手はこのクラブで活躍した選手です。ザダルというクロアチアの街の出身ですが、選手としてはこのヘルツェゴビナ地域のジリニスキーで成長し育っていきました。

それだけ、タレントの宝庫なのです。

この地域で生まれる選手の多くは攻撃的な選手が多いです。ゴールを強く意識してプレーする選手が多いです。

３．ボスニア・ヘルツェゴビナの育成の現場

次は、ボスニア・ヘルツェゴビナの育成の現場についてお話ししたいと思います。

ボスニア・ヘルツェゴビナはＵＥＦＡのプラティニ会長が主導して、バルカン地域で唯一ＵＥＦＡ公認ライセンスが取得できる地域として指定され、サッカーを通じた社会貢献の一環として財政的支援を受けました。このＵＥＦＡライセンスを取得すると、ＵＥＦＡ加盟国の全ての国で指導者としてサッカーの指導ができるものです。

今は、マケドニア、クロアチアでも取得できるようになりました。

私もこの２期生として１８歳以下を指導できるＢ級ライセンスの指導者となりました。

この指導者ライセンスの講習会はとても充実したものでした。

その講習会で私が感じたことは、常に新しい物、良い物を取り入れようという姿勢でした。

本来であれば、講習会の指導者はユーゴスラビアの指導者の大家であるオシムさん、ベルデニック

さんや、パンテリッチやミリャニッチさんなどバルセロナを率いたような指導者を呼んでこれば済む話ではないかと思いました。ところが、私が受講した時はオランダサッカー協会から講師を派遣してもらい、その後は、イングランドから派遣してもらうなど、常に外から知識を取り入れるという姿勢が見られました。

なので、日本にとても良く似ていると思いました。

日本がＧＥの電化製品を取り入れ、それを日本風にアレンジして松下電工やソニーなどが新たな電化製品を生み出していく。その二音のお家芸ともいえるものととても良く似ていると思いました。

とにかく、外のものを入れて、ユーゴスラビア方式にアレンジして、よりよくしてユーゴスラビア版のサッカー指導方法を確立させて指導していくというものでした。

私はどうしてオランダから、あのオーフェルマルスのようなサイド専用の選手が誕生するのかということを身をもって感じることができました。要するに、オランダでは、ポジションごとの専用の練習方法がありました。センターバック専用練習、ボランチ専用練習などがあるんです。サイドハーフ専用練習なんかは「吐きます。」と行ってしまうほど大変なものでした。

日本の体育会系の練習ではないんです。常にボールを使った練習なのですが、大変です。一つトラップミスをすると、５０m位全力でバックしないといけないんです。要するに、サイドでボールを失うとどれだけ大変か、サイドが高い位置でボールを持つとどれだけ前線の選手や中の選手たちが有利に戦うことができるかということを身をもって学ばされる内容でした。感覚で覚えさせられるんです。私がオーフェルマルスのところで練習がしたいと言ったことで、本当にひどい目にあいました。センターバックの練習にしておけばよかったと深く後悔したものです。

さて、この講習会の後に強く感じたものがありました。外から入れた「血」を自分たちのサッカーにどのように生かしていくか、そのことに本当にユーゴスラビアの国々は優れているかということです。

この講習会の後からボスニア・ヘルツェゴビナ代表は強力なサイドを起点としたサッカーで結果を残していきます。オランダのサッカーから取り入れたものを見事に融合させたんです。その結果、ヨーロッパ予選では強豪のデンマークを相手に、コペンハーゲンでサイドを起点にデンマークを圧倒して勝利しました。グロンケア、ロメダールという世界的に有名なサイドの選手たちを擁して、スピードとシステムで優れていたデンマークをサイドに強さで圧倒して勝ちました。ボスニア版のオーフェルマルスをつくり、勝ち取った勝利です。

もう１つの視点ですが、それは実際に指導の現場にもいた私の視点から話をしたいと思います。

ぼくは指導者としての勉強をしに、よくほかのクラブ練習を見学させてもらいました。そこで知ったことはたくさんあります。例えば、小さい子が使うボールはブニョブニョの柔らかいボール。ボールを怖がらないようにするために、あえて柔らかいボールを使うんですね。そして、１対１の練習では選手たちがビブスを持つんです。うにするためなのです。掴む癖をつけない。

それから、オシムさんの練習で有名になった多色のビブスを使った練習ですが、あれは、ボスニア・ヘルツェゴビナをはじめ、旧ユーゴスラビアでは普通によくある練習です。あの方式で鬼ごっことかをよくやるんです。むちゃくちゃ頭を使いますので、とてもいい練習なんですね。子どもたちは混乱するのですが、混乱する中で自分なりにどのような判断、工夫するかということを指導者は見ています。

さて、講習会で出会った指導者仲間や、出かけていったクラブのコーチたちと話していろいろと勉強させていただいたんですが、彼らが口をそろえて言う言葉がありました。

それが指導者としてのディシプリン、原理・原則であるということを知りました。

「手に職をつける意識で指導する」

この子どもたちがサッカーで食べていくために、この年で何を教えていく必要があるのかというのを常に考えて指導しているというものでした。世代ごとに、１２歳なら何を、１５歳なら何をというのを常に考えて子どもたちを指導し、彼らが大人になった時にサッカーで食べていける人にするために、指導をしているというものでした。

よく見てきた指導の現場で感じたことは、大体いいコーチは怒鳴りません。んで、ぼくが日本に連れてきたコーチがいたのですが、彼はよく怒鳴るんですね。そして、彼のチームはやっぱり強くなかったですね。やっぱり、子どもたちに怒鳴ってしまっては絶対にダメですね。小学校世代は怒鳴る必要が一切ないと思いません。問いかければいいと思います。

よくコーチが、「なぜそこで右に行かないんだ！」とかいう声を耳にしますが、その時点でコーチの主観が入っています。でも、いいコーチはそこでこう問いかけますね。「他にはどんなプレーを考えていたの？」と。

すると、子どもからいろいろなアイデアが出てくるものです。子どもでも２、３個は出てきます。そして、そのアイデアはどうして採用されなかったのかを問いかけると、子どもから言葉が出ています。

「トラップが大きかったから。」「左足で蹴ると失敗すると思ったから。」などの言葉が出てきます。

その時点でコーチの役割があります。

「トラップが収まるような練習をしよう！」とか「左足でも上手に出せる方法を考えよう」とか子どもたちに寄り添って指導ができます。そういう指導者が良い指導者の条件であると私は学びました。

指導者がもっている沢山の思考、アイデアの中で、子どもに正解を求めないで、子どもが考えたことを引き出してあげるということができていると思いました。それは、手に職をつけるとという意識が常にあるからだと思っています。

さて、最後にハリルホジッチさんとつながりのある人たちを紹介したいと思います。

ブラジュ・シュリシュコビッチさん。ボスニア・ヘルツェゴビナ代表監督として、初めてあと一歩でユーロ本選出場というところまでチームを成長させた人です。

プレドラグ・パシッチさん。彼は、シュツットガルトで活躍し、ユーゴスラビアのスターであるドラガン・ジャイッチの後継者としてユーゴスラビアの左サイドを担った名選手です。彼は、ボスニア・ヘルツェゴビナの戦争中に子どもたちの心の傷（トラウマ）をサッカーを通じて取り除いてあげようと、戦火の中オリンピックホールの中にサッカーができる環境を作ろうと私財をすべて投じてアカデミーを創設し、多くの子どもたちにサッカーができる環境を提供した人物です。

この２人とハリルホジッチさんには深いつながりがあり、８２年のスペインワールドカップを目指して共にユーゴスラビア代表のユニフォームを着てプレーした仲間です。

それは、戦後も続いていて、今でも指導者としてのつながりがとっても深いです。それは民族とか国とかを問わず、今でも続いています。

その元選手だった指導者たちの絆をもとにつながりを強めているのが、ライセンスを統括するムニル・タロビッチというサラエヴォ大学の教授です。彼が中心となって指導者のネットワークを構築して、オシムさんなどの有名な指導者たちも巻き込んで指導者育成に向けた強固な育成の現場を作ろうとしています。

（小池さんのまとめ）

モスタルに行くと、ネレトバ川という川があるのですが、とっても川の流れが速いんです。スタリ橋を落としてしまうと川を渡れないんです。人が行き来できなくなるんです。なので、あの世界遺産の橋はわざと狙われて壊されたんです。また、ジリニスキーのスタジアムがあるモスタルの西側に行くと、あの付近はもうクロアチアです。国旗はクロアチアの国旗が掲げられていますし。

ベレジュのスタジアムですが、地図に載っていません。幹線道路沿いの掘立小屋のような更衣室があって、杉並区の運動場よりもひどい状態でした。そんなところで、多くのタレントが出てきていること、それを知りたいと私は個人的に強く思った次第です。

【質疑応答】

●モスタルなどの街のスケールを教えてほしいです。町の大きさ、人口などです。

・モスタル市とかは、日本でいうと松本市などを考えていただけるといいと思います。風光明媚な自然の美しい山岳地帯です。他の街については、もっと小さい規模だととらえていただければと思います。ドゥブロヴニクは観光地として栄えているので、スケールを当てはめることは難しいのですが、外国からの観光客がとても多いので、人は多く感じますが、街の規模として考えると伊豆半島の伊東や下田などとあまり変わらないかと思っています。
モスタルはこの地域において､最も大きな町であるということでとらえていただきたいと思います。

●ボスニア・ヘルツェゴビナ全体の人口は？（中塚さん）

・約 400 万人。統計が正確にとれているのかということは非常に疑わしいです。国外に住んでいる人もいますので。

●イメージとしては、東欧のブラジルと言われていますが、規模的にはウルグアイと考えてもいいでしょうか？（阿部さん）
・そう感じます。

●ウルグアイはサッカーだけですが、この地域はほかのスポーツも強い。いったいどうなっているのか？（中塚さん）
・よくブラックジョークで使うのが、球（たま）を使うのが上手だから、戦争の時も弾（たま）を使うのが上手だったとか言っています。(笑)
ちなみに、水球のワールドカップである世界選手権の準決勝はセルビアとクロアチアとモンテネグロでした。決勝はセルビアとモンテネグロでした。私がボスニア・ヘルツェゴビナにいた時の欧州選手権の決勝もセルビアとクロアチアで、その会場がスロベニアという状況でした。スロベニアの警察官が見守る中、セルビアとクロアチアの選手たちが水球をし、サポーターたちはスタジアムを壊して、燃やして暴動を起こすというものでした。見てる方からするとさすがだなと思います。
バスケットボールでも世界選手権をユーゴスラビアが優勝しました。バルセロナオリンピックでもアメリカのドリームチームと決勝を戦ったのが、クロアチアでした。また、バレーボールでもシドニーオリンピックでユーゴスラビアがグルビッチ兄弟の活躍で優勝しました。最近は野球にも触手を伸ばし始めたので、そのうちＷＢＣもとるんじゃないかと思っています。(笑)
強くなる１つの要因としては、ライセンスを持った指導者が「手に職をつける」という意識で指導をしているという指導体系がしっかりしていることが挙げられます。また、地域で連携して一緒になって育てていく姿勢も挙げられます。あるクラブがスタジアムが使えないときはほかのクラブのスタジアムを共用して、練習するとか、地域のクラブ同士が協力し合って選手を育成していることが挙げられます。
そして、選手たちはどのスポーツも上手です。サッカーだけでなく、バスケットボールも、ハンドボールもバレーボールも上手いです。とにかく、いろんなスポーツをします。
私は、卓球だけは勝てると思い、地元の人と試合をしたのですが、卓球でも完敗でした。なにせ、今はテニスも超強いですね。ノヴァク・ジョコビッチ選手。女子でも、アナ・イヴァノビッチ選手が世界ランキングの上位にいます。
何か苦手な物はないのか？

●この地域の言語能力の強みとかはありますか？
・ロシア語と近いので、同じスラブ語圏の人たちとの会話は容易かと思います。英語については、若い世代はとても良く話せますが、私より上の世代については、英語がそんなに話せません。ユーゴ圏の人たちですと、ロシア語とドイツ語を習っていた人が多かったですね。ガストアルバイター制度でドイツに渡った人が多いので、ドイツ語を話せる人が多いです。今のボスニア・ヘルツェゴビナ代表選手たちの多くもドイツで育った人たちが多いです。
なぜ、ドイツやスイスに移住するのかというと、国が定めた最低労働賃金があって、労働条件が整っているからです。月３０万円ほどが稼げるんです。そして、休暇になると母国に戻ってきます。

●ハリルホジッチさんはなぜフランス語なんですか？
・ハリルホジッチさんはフランスで活躍して引退した後、ボスニア・ヘルツェゴビナのモスタルに戻ってきてカフェを開いて、ヴェレジュ・モスタルのスポーツディレクターに就任して、モスタルの為に自分の人生を尽くそうとしました。そこで、内戦が起きてしまい、開いたカフェも家も焼かれてしまいました。自身も戦争を食い止めようと、武器を持った武装勢力が睨み合う道の真っただ中

に立って、「戦争をやめろ！」と訴えました。そして、護身用の銃が暴発して自分のお尻を撃ってしまい重傷を負います。家族が危険にさらされているということで、ハリルホジッチさんは国外に逃れ、フランスで３年間無職で過ごし、やっと３部リーグのチームを率いて、そこから指導者としてキャリアをスタートします。そこから、ナントをチャンピオンズリーグに導き、パリ・サンジェルマンを率いるまでになります。彼の指導者としてのキャリアはフランスで始まり、フランスで築かれたものです。なので、サッカー指導の言葉は母国語よりもフランス語が出てくるというくらいでした。なので、フランス語ということになるのだと思います。

●フランスというと、オシムさんはストラスブール、スシッチはパリ、ストイコビッチはマルセイユ、多くの選手が母国からフランスに行っているので、どうしてフランスなのでしょうか？理由はあるのでしょうか？

・もちろん、パシッチさんの時代はドイツブンデスリーガが強かったので、ドイツに行く選手も多くいました。ただ、フランスについては歴史的にユーゴスラビアはフランスと仲がいいというものがあります。クロアチアはドイツと仲がいいというのもあります。第二次世界大戦中もクロアチアにはドイツの傀儡政権が置かれましたし、ユーゴスラビアからクロアチアが独立する際に最初に国家承認したのもドイツですし、クロアチアとドイツは非常に近いです。なので、セルビアの方はどちらかというとフランス寄りになるという要素もあるのかと思います。
ただ、オシムさんの時代はサンテティエンヌが強かった時代で、フランスのリーグアンが強い時代でしたし、ミハイロビッチ選手やスタンコビッチ選手やサヴィチェビッチ選手、ボクシッチ選手、ユーゴビッチ選手の時代はイタリアセリエＡが強かった時代なので、イタリアで活躍する選手が多かったと思います。要するに、強いリーグに行くということが一番の要因であると思います。
今は、イングランドプレミアリーグ、ドイツブンデスリーガで活躍する選手が多いですね。

●「手に職をつける」という意味では、サッカー選手以外に職業というのはどうなんですか？

・失業率は発表されているもので、連邦側で２０％を越え、セルビア人共和国側は４０％を越えるとされています。ただ、実際は７０％を越えていると言われています。
今は、いい教育を受けられるようになってきているのですが、職がないんです。なので、彼らが一番最初に考えるのは、まず、西ヨーロッパに行って稼いでから帰って来るということを考えます。それは、サッカー選手と同じだと思います。
今、この国だけで設けている人たちは、旧共産主義時代の国営企業を引き継いだ一族系か、戦争中に好き放題やって来た「ならず者たち」ですね。宮殿のような御殿が建っていたりします。サッカークラブのオーナーになっている人もいるくらいです。
なので、お金がある人はそう言った人か、ヨーロッパで稼いで戻ってきた人たちということになります。

●指導者の社会的な立場というのはどうなっていますか？リスペクトされているのか？給与面はどうなのでしょうか？

・給与についてはクラブの規模次第です。小さなクラブとなると、副業を持ってやっている人が多いです。コーチたちは非常にリスペクトされています。子どもたちはみんな「トレーネル」と呼んで敬意を払います。その一番の要素は、子どもたちの多くがそのコーチの現役時代のプレーを見ているからだと思います。コーチの多くがそのクラブを選手として活躍して引退した人たちです。そのコーチたちが小さな子どもたちの指導者になります。最近まで、子どもたちが憧れていた選手だった人がコーチとして教えてくれるとなるので、子どもたちは憧れますし、そのプレーを覚えている

ので、尊敬します。

●地域のクラブに通えていること、通えていないこの比率はどうなるのでしょうか？ストリートチルドレンでも這い上がってこれる子はいるのでしょうか。

・全くお金がなくて這い上がって来られるかというとそれはなかなかないです。どんなに小さいクラブでも、月謝を払って指導を受けます。そんなに高くないですが。ちなみに、サッカーの観戦チケットになると、地域リーグの試合となると大体１４０円くらいですが、トップリーグの例えばダービーのような試合ですと、一番高い席が２８００円くらいになります。それだけの差はあります。なので、トップリーグのクラブのユースに入るとなるとそれなりの額を払わないといけません。なので、そのクラブの周辺にある月謝の安いクラブチームに入るということになります。日本でいうと、ＦＣ東京の周辺にある横河武蔵野とか、三菱養和とかになるということです。なので、私たちが創設したクリロは無料で子どもたちを集めました。民族関係のないサッカーを通じた交流を目的としていたので、とにかく子供たちを集めるという目的を達成するために、無償で子どもたちにサッカーができる環境を整えました。
ただ、私たちのクラブからもプロ選手が生まれています。
先日、トップリーグで卒業した子どもたちが直接対決しました。女子でもＡ代表選手が生まれました。ただ、彼らを私たちが最後まで指導したわけではありません。交流のあるクラブ、大会で出会ったクラブなどの関係者から声がかかり、そのクラブに呼ばれてよりいい条件でサッカーができるようになります。その時は、クラブ側からの誘いなので、ある意味特待生のように費用が免除されることが多くあります。なぜなら、タレントはクラブ取ってマニーなので。チケットやスポンサーで稼げないので、１番金になるタレントを育てて売ることを重視しているので、才能のある選手は優遇された条件でサッカーができるようにはなっています。

●スポーツができるといい稼ぎになる地域なんですね？

・そうだと思います。代理人にでもなっておくべきでした！(笑)

・(小池）怪しい人間がいっぱいいますね。聞くと、１３歳で代理人がいました。怪しい人間がついています。要するに、選手をヨーロッパに送るというシステムができているんですね。小さい子でもいいスパイクを履いていたりします。スポンサーがついているんですね。

・レッドスターや、パルチザン、ディナモ・ザグレブ、ハイデュク・スプリットなどのビッグクラブになると、旧ユーゴスラビア時代からユーゴ全域からタレントが集まるシステムが出来上がっています。ディナモは今でも凄いですね。今のクロアチアの代表のほとんどがディナモ出身です。若いころは、ボスニア・ヘルツェゴビナのリーグとかで試合に出させて、脂がのってきたら、ポーンと売る。養殖みたいですね。私たち日本人からすると、米が主食じゃないですか。要するに、「魚沼産コシヒカリ」みたいな感じですね。この地域の選手たちは。絶対安全、絶対美味しい。

●１５年くらい関わってきて､一緒にプロジェクトをしてきた当事者を置いておいて､この地域の人々と地域の変化というもので感じてきたことを教えてください。

・９９年に初めていった時は、境界線にバリケードがあって、燃えた車がひっくり返ってそこらじゅうにありましたし、空港はガラスが割れたままでした。境界線が目に見る形である状況でした。私は絶句しました。衝撃的な状況でした。この私が初めていった時に２ヵ月間を、私は目に見える状態の境界線を行き来して人々の交流をしていこうという活動をしていた人たちと過ごしていたのですが、その人たちのパワーは本当に凄いものでした。
その経験を経て、サッカーを通じて民族交流をしようと始めるのですが、私の「いけなかったとこ

ろと」、「よかったところ」は、共に「知らな過ぎた」ということでした。私が活動を始めたイリジャという地域は空港があって、セルビア人勢力とイスラム教徒が激しく戦闘を繰り返し、前線が何度も移動するという地域でした。なので、地雷原も普通にありました。ただ、私は地雷原はボスニア・ヘルツェゴビナ全土にあるのが当たり前だと思っていたので、それが特別なものだと思っていませんでした。私はこのイリジャで、セルビア人側とイスラム教徒側の子どもたちを集めて活動してきたんです。

その活動を続けて、３年くらいが過ぎた時、やっと現場の状況を理解して、私は一緒に活動をしてきてくれたセルビア人とイスラム教徒のスタッフとコーチに「よくこの状況でこのプロジェクトができたよね。」と言ったんです。すると、彼らからは「ふざるな！」と笑いながら言われました。彼らが言うには、自分たちはそんな状況は百も承知だったけど、そんな状況にもかかわらず、どんどん初めて突っ込んでいく私がいたから、しょうがなくついていくしかなかったそうです。サラエヴォに住んでいる人にとっては当たり前のことだったのに、それを知らないのは私だけだったんです。地雷がなぜ埋められている地域というのは激戦地である証拠であることも今では知っているのですが、その当時は知らずに活動を始めていたんです。

でも、少しずつ、境界線を越えて人々が行き来ができるようになってきていますが、警察の嫌がらせが境界を越えて行われていたります。タクシーも境界線前に、タクシーのランプを外すのは当間背になっていますし、まだ、境界線はありますね。サッカーの世界でも、統一されましたし、ユース世代でも統一され、融合されてきていると思います。ただ、サポーター同士となると進んでいないところもあります。

●アルカンの向こうでの評価はどうですか？

・イスラム教徒の人たち、クロアチア人の人たちの前でアルカンという名前を出したり、セルビア側で売られているアルカンのＴシャツを着るという行為は自殺行為に等しいです。ただ、セルビア側では、セルビア人をイスラム教徒やクロアチア人から守ってくれた英雄としてとらえる人もいます。逆に、クロアチア側、イスラム教徒側にもアルカンのような人がいっぱいいます。そうなると、彼らにとっては英雄になってしまいます。

ただ、これだけ言えることは、絶対に「英雄」ではないです。ユーゴスラビア紛争において、英雄は生まれるはずがありません。

正規軍同士の戦闘ではありません。なので、ならず者たちが好き放題やって来た戦争です。なので、英雄というものが生まれるはずがありません。軍事的に致し方なかったというものは決してあるとは思いません。

何がどうであれ、ラジュナトビッチが英雄になることはあり得ないと思います。殺した人の数、理由ではなく、とにかく、犯罪であることは間違いありません。